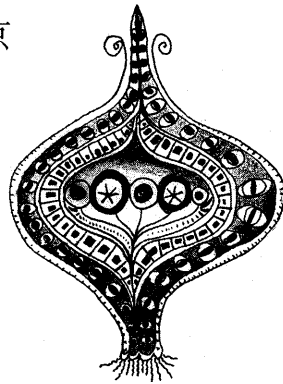


## 附属幼稚園の教育(5)

発達のとらえ方とそれをふまえた

指導のあり方について その2

村石 京



前号では附属幼稚園での教育の中で、発達についてのとらえ方の変遷と、現在の考え方について述べてきました。

現在附属幼稚園では、発達とは基準としてみるのではなく「個々の発達の過程」と考え、子ども一人ひとりの発達の道すじを大切にするという考えにたっています。それではこの考えのもとで

は、実際の保育はどうあったらよいのでしょうか。現場の保育者としては、個々の子どもの発達の確にとらえ、その子どもの今もとめていることを知り、それに合わせながらその子どもの伸びる方向づけをしていくこと、これが発達をふまえた指導のあり方というものであると考えます。

保育者は級の中の一人ひとりの状態を見て、そ

の子にとっては何が大切かを考えながら保育を行っていく、つまり個に合わせた対応の仕方をとっていくことが当然基本となります。一人ひとりの子どもの成長発達は一人ひとり異なったものですが、個の中には一つの道すじがあり、系統性があります。それは一人ひとり違うものである中で、基準とか水準とかいったとらえ方をすると、それにあてはまらない場合には水準よりおかれているとみでは問題視したり、既定のわくに入らない子どもは不適応児といった見方をしたりしがちになります。

しかし、保育の中での考え方の視点を全く変えて、個々の子どもの夫々の発達の過程があり、それは個によって一人ずつ異なっているという考え方をするならば、今述べたような子どもの見方は起きないはずで、そして指導のあり方も当然一人ひとりの子どもに合わせた個別のものになるということとなります。これが現在の私も附属幼

稚園での指導法であり、指導形態なのであります。

保育者はまずこの考え方を軸として、一人ひとりの子どもの姿を確実にとらえることからはじめます。その子どもの姿、その子どもの今もとめてあるもの、その子どものつきあっているものなど、様々な側面を見ることによって、一人の子どもをトータルに構造的にとらえていくことが必要となります。そしてそれが私も現場の人間の、現実に合わせて行っていく研究なのではないかと思えます。その子どもトータルなものを知ることとは、その子どものもつ「発達課題」をとらえていくことにもなります。

指導の場面では、個々の子どもの発達を促すような助言や援助を行っていくことが肝要となります。具体的には、その子どもの発達に合わせたもの、そしてその子どもとめてあるものに合わせた状況をつくっていくことが大切となります。

例えば四歳児などはよくごっこ遊びを楽しんでやりますが、それも教師が活動として先だって与えるのではなく、子どもの側の要求や意欲に応じて教師が適切な環境を設定したり、助言をしたりして指導をしていくことがよく発達を促すことにもつながると考えます。あるいはまた、ある子どもが今ぶつかっている状況があるとします。例えば友だち間でトラブルを起こしがちな子どもは、自分をコントロールしていく力をどうやったらつくっていくけるかとか、あるいは引っ込み思案な子どもは自分を充分に出し、のびやかに行動出来るようになるにはどうしたらよいかとか、あるいは受動的なことに満足している子どもが自分で考え、自分で伸びていくようになるにはどのような指導をしていったらよいかなど、現場からの例はつきませんが、とにかく幼児の全人的発達を促すための援助をしていくこと、これが指導なのであると考えています。

この考え方は一人ひとりの発達の過程が異なっているというところから出発したのですが、教育そのものも結局は個に合わせた指導となり、その子の発達に合わせた教育ということになります。当然実際の保育も級や年齢によるカリキュラムによって一せいのに行われるのではなく、一人ひとりに合わせたものとなってきます。幼稚園の生活の中で、子どもが教師やカリキュラムによって生活していくのではなく、私も保育者が子どもにも合わせ、子どもののぞんでいるものに合わせた生活を子どもと共につくっていくこと、これが一人ひとりを大切にする保育であり、個の発達に合わせた指導なのであると思います。

勿論、現実には子どもは級の中で生活しているわけですから、その子ども単独な存在ではなく、友だちとのかわりの中で、あるいは級のメンバーの一人としての指導も大切なことはいうまでもありません。しかし根本は教師主導型の保育では

なくて、子どもが主体であり、私も保育者は子どもに合わせていくという気持ちを忘れてはならないと思います。

実際の指導にあたっては、計画や材料を先に出すのではなく、子どもの遊びの中から生まれてきたものを適正にとらえ、伸ばし、表現していくことが出来るように助言したり、教材を提供したりしていく必要があります。これを行っていくには保育者が自分自身の中に能力、資質、的確な判断力などをもつとともに、教材研究などを日頃から充分に行っていないと、その場その状況に応じた指導を行っていくことは難しく、大へんなことなのです。しかしあくまでも幼児の遊びの生活をくずすことなく、指導し、つまり保育者が全面に出て指導するのではなく、幼児の生活を支えつつ深

めていくということを根本にもつことが大切なのだと考えます。

幼児の日常生活から生まれてくる活動は、瞬間的であったり、継続的であったり実に多様です。この日常の中で、個人の発達を大切にすると、この日常の中で、個人の発達を大切にすると、観点があり、その場その状況に適した指導をし、子どものもつ様々の可能性を十分にひき出していくというのが私も保育者の役割であると思えます。保育者は子どもの遊びの中にみられる様々な発達の可能性に注目し、大切にし、実現していくことが出来るように、助言、援助、指導をしていくことが、発達をふまえた指導というものであると考えます。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)